

部会だより

本町部会

構想と戦略

三月十一日に我が国で発生した震災により、競技場の被害や電力不足によりスポーツにも甚大な被害がでたのは、皆さんもニュースで御存じの通りでしょう。

その時に即時に対応をしたのは、Jリーグ（サッカー）です。まず、競技場の被害と周辺住民が被災している状況での開催には不十分として試合の延期の判断を下したことは早い判断であった、それに比べてプロ野球は、選手会の意見とフロントの意見が合わずに2転3転と変わりなかなか決まらない状態であった。このニュースを聞いて私はあることを思い出しました。以前に読んだ本で、鹿島アントラーズの

戦略・考え方の話を紹介します。

鹿島には監督選びにおいて一貫している。初代 宮本監督以後は、ジコイズムを継承するため一貫してブラジル人監督を招聘してきた。これには、ブラジル人を主に外国人選手を獲得しているの、ブラジル人の気質をクラブ内で理解しやすい点でも有利である。選考の際には鹿島OBのブラジル人たちから情報を集め、チームに合う人物かどうかを検討して決めているのである。監督の補佐役として日本人コーチを置くことだ。これには、日本人の指導者を育てること、日本人のコーチが間に入ることで、監督の言葉をフォローしたり、逆に選手の要望を監督に伝えたりできるようになりコミュニケーションが円滑になりやすいことである。

次に、選手の育成を行う環境を演出することが、鹿島の強化部門

の仕事で監督の仕事と分けていく点である。

選手の駒不足に陥った際、監督が若手をチョイスしなければならぬチーム編成を意識的に行っているのである。厚すぎず、薄すぎずというぐわいの戦力にしてある。薄ければ勝てないし、厚すぎたら不満分子が出てくるからです。日本人選手を育てるために、外国人選手を同じポジションに2人並べないなど、若手選手が試合に出られる環境がある。今までも、柳沢選手が移籍した後に、興梠選手、小笠原選手がセリエAへ移籍したときには、野沢選手と若手選手を中心に台頭してきました。因みに内田選手がブンデスリーグへ移籍した後の新井場選手や伊野波選手はガンバ大阪・FC東京からの移籍組ですが伊野波選手は鹿島に来てからザックジャパンに入るまでに成長し7月にはクロアチアへ移籍になりました。

また、個々がチームに参加しているとの意識が生まれ一体感がチーム

に出てくるようになり、そして、チームも選手を大切にしていけることも大事にし、戦力外提示を出来るだけしない、なるべく移籍先を見つめるようにし、出来る限りチャンスは与えるようにしている。

これが、強い戦略なのでしようそして、今回の震災などでの早い決断なども選手を大切にすることで生まれたのかもしれない。また、Jリーグ自体も地域に根ざしたスポーツクラブづくりを理念に百年構想などもあり地域の復興を優先に考えたからでしょう早い決断をする事が出来たと考えられます。

この理念がJリーグ各クラブにも浸透しているので、方針がまとまっていたと思います。

青色も六十二年目を迎えたのでありますが、青色もJリーグに負けないように頑張っしてほしいと思います。